

# MaaS<sup>※</sup>でつながる 「公共交通」の未来

MaaSで人々の移動をより便利に快適に

※ Mobility as a Service  
(移動手段をサービスとして提供)



## MaaSがもたらすメリット

### 社会／事業者

- ・環境負荷の低減
- ・道路渋滞の緩和
- ・過疎地域での交通手段確保
- ・繁忙期、閑散期でも輸送量が安定
- ・適正運賃の収受が可能 など

### 利用者

- ・移動経路の検索、予約、乗車、決済機能が統合され、利便性向上
- ・最適な交通手段を選択でき、目的地まで効率的に到着可能
- ・自家用車への支出が減り、家計負担軽減
- ・高齢者の外出機会を創出 など

## これからの課題

- ・地方、都市部それぞれの地域のニーズに合ったサービスが必要  
(地方:過疎地域における交通サービスの縮小への対応 都市部:道路渋滞・環境問題への対応)
- ・高付加価値の提供には、競合他社や異業種との連携・協業していくことが不可欠 など



## シェアリングサービスに、金メダリストも参入!?

日本でも広がりがつつあるシェアリングサービス。これはモノを所有せず、スマホアプリなどインターネットを介してモノを他人と共有する、新しいビジネスの形態です。ヨーロッパでは、EUによる普及の後押しがあり、日本と比べシェアリングサービスが大きく広がっています。例えば、車を共有するカーシェアリングは、15分と短い時間から気軽に利用することが可能。また企業ではなく個人が車を貸し出すカーシェアリングも、イギリスではスタートしています。

最近、フランスで急激に広がっているのが電動キックスケー

ターのシェアリングです。パリは渋滞が多く、その横をさっそうと走り抜くことができ、ビジネスでの利用も多いそうです。サービスを提供しているのは、アメリカのベンチャー企業や元陸上男子短距離メダリストのウサイン・ボルト氏が創設した企業など。一方課題としては、キックスケーターの放置や歩行者の安全確保などが挙げられます。そして、これらのシェアリングサービスは、近年「新たな移動の概念」として登場してきたMaaS (Mobility as a Service)のひとつといえます。

## MaaSによって「公共交通」の利用が拡大

MaaSとは、交通手段をスムーズにつなげることで、人々の移動がより便利で快適になるという考え方。例えば、スマホアプリに現在地と目的地を入力すれば最適な手段が表示され、各交通手段を検索するといった煩雑なプロセスを省くことが可能。さらに予約から運賃決済まで一括で行えます。利用できる交通手段は、先ほどのシェアリングサービスに加え電車やバス、タクシーなど複数の公共交通にわたります。

MaaS先進国の北欧フィンランドでは、「Whim(ウィム)」と

いうスマホアプリを使ったサービスにより、マイカー利用は半減。公共交通の利用は1.5倍に増えたそうで、交通渋滞や環境問題の緩和に期待されています。しかし課題としては、各事業者が時刻表や運賃、車両の位置情報などのデータをどれほど開示できるか、という点があります。イギリスでは、バス・鉄道事業者に上記の情報を無制限で公開することを課す法律が施行されています。

## 日本のMaaSは公共交通の救世主になれるか?

日本では、ヨーロッパのようなMaaSサービスはまだ出てきていませんが、各地で実証実験などが行われています。

2020年、鉄道会社が首都圏の郊外エリアで、鉄道・バスに加えタクシーやシェアサイクルなど複合経路検索サービスの実証実験を実施。また茨城県境町では、ハンドルのない自律走行バスの実用化が発表され、運転免許を返納した高齢者が利用

できる交通機関として注目を浴びています。

交通に関わるデータの活用で、公共交通のより効率的な運用が可能になり、運行コスト削減につながることも考えられます。その結果、路線縮小に歯止めをかけられることも期待できます。日本では今後さらに公共交通機関が運動していき、社会・事業者・利用者のそれぞれにメリットをもたらすことでしよう。

角井 亮一 (かくいりょういち)

株式会社イー・ロジック 代表取締役社長兼チーフコンサルタント。上智大学経済学部を3年で単位取得終了し、渡米。ゴールデンゲート大学からマーケティング専攻でMBA取得。2000年、株式会社イー・ロジック設立。著書に「アマゾンと物流大戦争」すい物流戦略(日本語/ベトナム語)などアマゾンや物流関連の書籍を多数出版。

